

ハイデ

イ
(第二十九回)

津田芳雄譯

三八

御飯がすんでみんながいろんなお話をしてゐる時、クララはお父さまをわきへ引つ張つて行つて、今までにない熱心さで云つた。

「お父さま、おぢいさんは、毎日それはそれはよくして下さつたのよ。おぢいさんの親切は、数へ切れなくくらゐで、あたし一生忘れないわ。それであたし、さうしたらせめてその半分でも、御恩がへしが出来るかしら、いつも考へてるの。ねえお父さま、何かして差し上げたいわ」

「それこそ、わたしのぞむところだ」

お父さまはさもうれしそうに、娘の顔を見ながら云つた。

「わしも丁度今、さういふ風に御恩がへしをしようか、考へてゐたところなのだ」

ゼーゼマン氏は、おばあさまに面白さうにお話をしてゐるおぢいさんのところへ行き、その手を取つて云つた。

「少し御相談があるのですが。わたしはもう何年間さういふもの、眞の幸福さういふものを知らずに過ごしてきました。金や財産が、何になりませう。山ご積んでも、可愛い子供の病氣ひさつなほせないものであつて見ればねえ。ところがお蔭様で、あなたはあれをすつかり、丈夫にして下さつて、あれの爲めばかりでなく、わたしのためにも、新しい生涯を拓いて下さいました。何かして、その御恩にお報いしたいと思ひます。もちろん、し盡せるものではありませんが、わたしに出来るだけのことは、何でもさせていだきたいのです。」

「ごうか何なりと、仰しやつて下さい」

おぢいさんは満足さうにほほゑみながら、しづかに聞いてゐたが、やがていつもの威厳のある調子で答へた。

「ゼーゼマンさん、お嬢さんが快くなられましたことは、わたしも非常に喜んで居ります。骨折りのものにも、もうそれですつかり償はれてしまひましたのぢや。御志は心から御禮申し上げますが、わたしには何も欲しいものもありません。わたしの目の黒い間は、わたしもあの子も、まつ、不自由はしますまい。ただ一つ、のぞみがありますのぢやが、それさへ叶へばもうこの世に何の心配もありません」

「ごうかそのお望みさいふのを、仰しやつて下さい」

ゼーゼマン氏は頼んだ。

「わたしもだんだん年をとり、もうあまり長いこともありませんまい。わたしが目をつぶれば、あの子は遺産はなし、ほかに身寄りさいへば、たつた一人、それも始終あの子を利用することばかり考へてゐるのが居るきりですのぢや。あの子が他人の中へ出て行つて苦勞せずともよいやう、面倒

をみてやるご御約束下さるならば、これに越す有難いことはありませんのぢや」

「ああ、そんなことならば、もちろん仰しやるまでもありません。あの子は實の娘だと思つてゐるのですからね。他人の手になぞかけてよいものですか。第一、わたしの母や娘が承知しませんよ。御心を安める爲めに、改めてここにお約束します。ハイディには他人の中へ出て生活の苦勞なき絶對にさせないこと、それはわたしの生存中は無論のこと、死後も引き續いてのことであること。それから、もう一つ別のお話があるのです。うちにしばらく來てゐて證明するのですが、あの子はこの土地を離れて住むことは、全く不向きです。ところが丁度都合よく、あの子を非常に可愛がつてゐる、昨年の秋こちらにお邪魔したうちのお醫者さんが、すつかりこの土地が氣に入つて、あなたのお勤めに従つて、近々フランクフルトを引き揚げて、ここへ永住しにやつて來ることになつてゐます。さうすれば、あの子は二人もの保護者と一緒に暮らすことになり、もう大安心なわけです。ごうかお二人とも、せいぜい長生きをして、末長くあの子の世話をみておやりになつて下さい」

「わたしも心からそのやうに祈つてゐますよ」

おばあさまもおぢいさんの手をさつて、全く息子と同じ考へであることを述べ、今度はそばに立つてゐるハイディの肩に手をかけて引き寄せた。

「あなたも聞かせて下さい、何か特別に欲しいものがありますか、ハイディちゃん」

「ええ、ありませんわ」

ハイディはうれしそうにおばあさまを見上げながら、即座に答へた。

「では仰しやい、何ですか」

「わたし、フランクフルトでわたしが寝てゐた、高い枕さふかかしたおふさんのついた寢臺がほしいのです。そしたら、ペーテルのおばあさんが、あんな息も出来ない、頭の方が低くなつたお床で、肩掛けなんか着て震へてゐなくてもすむんです」

ハイディは夢中で一息に云つた。

「まあ、なんてやさしい子でせうね」

おばあさまは感動して云つた。

「よくもペーテルのおばあさんに氣が付いてくれました。さかく人間は、うれしいことがあると、もうそれに夢中になつて、何よりも先きに思ひ出してあげねばならない氣の毒な人たちのことを忘

れがちなのです。早速フランクフルトへ電報を打ちませう。ロッテンマイアさんが今日荷造りをすれば、二日経てば届きますよ。おばあさんも、もうちき氣持よく眠れるやうになりますね」

ハイディはうれしがつて、おばあさまのまはりを跳んでゐるいてゐたが、急に立ち止まるこゝ、大急ぎで云ひ出した。

「わたし、すぐに行つておばあさんにさう云つて来てあげるわ。それに、あんまり長いこゝ行かなかつたから、心配しててよ、きつこ」

「これこれ、ハイディ、何を云ふ。お客様がゐれるのに、さうばたばたするものでない」

おぢいさんがたしなめた。

けれどもおばあさまは、ハイディの肩を持つて云つた。

「いいえ、あの子がわるいものではありません。可哀さうに、おばあさんは長い間、わたしたちにハイディを取られてゐたのですからね。みんなこれから訪ねて行つてあげませう。わたしの馬も待つてる筈ですから、そこからデルフリまで下りて、早速電報を打つことにませう。あなたはさう思ひますか?」

おばあさまは息子を振り返つた。するさぜーゼマン氏は、ここへ来るまでは、クララのからだの工合さへよければ、ほんの少しだけでもスキス旅行に連れて行きたいと願つてゐたところ、クララはこの通り元氣なので、もう全行程を一緒に行けるから、さうなれば、この美しい夏の末を取り逃さずに、少しも早く出掛けたいから、今夜は自分はおばあさまと二人でデルフリに泊り、明日の朝早くクララを迎ひに来て、三人でラガツ温泉から發つことにしたいといふ考へを申し出た。

クララは、はじめはそんなにもだしぬけにこの山とお別れするのがいやだつたが、一方又、旅行のこさを思ふと、たのしみでもあつた。それに、そんなに悲しがつてゐるひまもないのだつた。おばあさまはもう、ハイディの手をひいて先頭に立つてゐた。クララはおぢいさんに抱かれ、ゼーゼマン氏を殿に、かうしてみんなは山を降りて行つた。ハイディはおばあさまと並んで歩きながら、うれしくつて跳ねまはつてばかりゐた。おばあさまはペーテルのおばあさまがさうやつて暮らしてゐるか、殊に冬の寒い時にはさうしてゐるかなど、いろいろ訊ねた。ハイディはおばあさんのことを

ら何でも知つてゐるので、冬の寒い時は隅つこにうづくまつて震へてゐるこや、おばあさんの家にはどんな食べものがあり、どんなものがないか、さういふことまで、すつかり話してあげた。おばあさまは、小屋に著くまで、思ひやり深くちつと耳を傾けてゐた。

この時丁度ペーテルのお母さんは、ペーテルの著換へのシャツを乾しに出てゐたが、みんなの姿を見るに、急いで家に駆け込み、おばあさんに報告した。

「みんなが通つてゐるよ。きつミフランクフルトへ歸るんだよ。アルムをぢさんが病氣のお嬢さんを抱いてるよ」

「ああ、そんなら、いよいよさうなんだね」

おばあさんは溜め息をついた。

「ハイディも一緒かえ。それぢや連れて行くんだねえ。ああ、せめてちよつこでも這入つて来て、もう一ぺんだけ、お手々を握らせてくれたらばねえ。聲だけなりと、聞かせてくれたらばねえ！」
この時、戸がさつと開いて、ハイディが轉がり込んで来て、おばあさんにしがみついた。

「おばあさん、おばあさん、三つも枕のついた、

ふかふかしたおふさんの、わたしの寢臺がフランクフルトから届くのよ。二日すれば来るつて、おばあさまが仰しやつたわ」

ハイディはさう云ふ間ももごかしく、早くおばあさんの喜ぶ顔が見たかつた。でもおばあさんはかすかに笑ひ、さびしさうに云つた。

「ほんたうに、御親切なお方だねえ、お前さんがそんなお方に連れて行つていただくのなら、わたしは喜ばなくちやならないのだが、わたしももう、長生きは出来ないのねえ」

「なんですつて？ 誰がそんなことを、大事なおばあさんにお聞かせしたのでせうね」

やさしい聲がして、ペーテルのおばあさんは、誰かにしつかり手を握られた。ハイディについて這入つて来たおばあさまだつた。

「大丈夫なんですよ。決してそんなことは考へなくていいのですよ。ハイディはごこへも行かずに、これからもずうつさ、あなたをお慰め出来るのですからね。わたしたちもハイディに逢ひたくなれば、又やつて来ますよ。このアルムのお山へは、毎年お邪魔したいと思つてゐます。わたしたちはここで、宅の子供に、それはそれは大きな御

恵みをいただいたのですから、毎年その場所で神様に御禮を申し上げに、登つて来たいのですからね」

するさペーテルのおばあさんの顔は、はじめとしんからうれしさうに光り輝き、幾度も幾度もおばあさまの手を握りしめては、うれし涙にむせぶのであつた。ハイディはそれを見るさ安心して、大悦びでおばあさんにかぢり付いて云つた。

「おばあさん、なにもかも、せんに讀んであげた讚美歌のさほりになつたわね。フランクフルトから寢臺が来れば、病氣だつて、きつさよくなるわねえ」

「さうさ、ハイディちゃん。そのほかにも、數へ切れない位いろいろの結構なものを、神様からいただいたよ。ああ勿體ない、勿體ない」

おばあさんはすつかり感激して更につづけた。

「——ほんたうに、こんな憐れな年寄りを、御心にかけて、なにくれさ心配して下さる親切な御方が、こんなに澤山ゐられようさは、思ひもよりませんでした。そんな御方のゐられることを思ふさ、ものの數でもないわたしのやうなものさまで、決して御忘れなさらぬ神様の御恵みが、し

みじみと有難く思へましてねえ」

「わたしたちは、神様の御眼から御覽になれば、みんな同じやうな憐れな頼りないものばかりで、神様はその一人一人をみんな御忘れなく、同じ様に御恵み下さるのですよ。さあ、もうおいさましなければなりません。——でも、ほんのしばらくの間ですわね。來年こちらへ來る時は、一番にあなたのところへお寄りますよ。それまでだつて、あなたのことは決して忘れずにゐますからね」

するさべーテルのおばあさんは、御穩居さまをなかなか離さないで、心から御禮をのべた上、この親切な恩人の上に、幾重にも神様の御恵みがありますやうに、お祈りするのだつた。

やつみの思ひで、おばあさまとゼーゼマン氏はいさまを告げて山を下り、おぢいさんはクララを抱いて、ハイディを連れて山をのぼつた。ハイディはおばあさんのことを思ふさうれしくて、一さ足毎に跳びはねてゐた。

でもあくる朝のお別れは、クララにはほんたうに辛かつた。この山の家はぎたのしく暮らしたところは、ないのだつたから。ハイディは一生懸命になぐさめようとした。

「夏なんか、ぢきに來てよ。そしたら、ほら、今度はおつと面白いわね。初めつから、二人でどこへでも歩いて行けるのですもの。毎日山羊とお山へ行つて、お花のいっぱい咲いたところで遊びませうね」

ゼーゼマン氏がクララを迎ひに來て、おぢいさんご名残を惜しみながら、立ち話をした。クララはやつと涙をふいて、

「べーテルと山羊たちに、よろしく云つてね。『小さい白鳥』には特別にね。あたし、『小さい白鳥』にはとてもお世話になつたから、なにかやりたいんだけさ」

「ぢや、いいものがあつてよ。お鹽がいいわ。夕方山から歸つて來て、おぢいさんの手からお鹽を舐めさせてもらつて、『小さい白鳥』がとてもよろこんでゐたの、あんた知つてゐるでせう？」

クララはその思ひ付きに、大よろこびだつた。

「ぢやあたし、フランクフルトに歸つたら、お鹽を百貫目ほど送るわね。あたしの思ひ出につて、『小さい白鳥』にやつてね」

ゼーゼマン氏は、二人の子供たちに出發の合圖をした。クララはもう寢椅子でかついで行かなく

てもよくなつたので、おばあさまの白馬が待つてゐた。ハイディは坂の一等端れまで走つて行つて、馬も、乗つてゐる人も影の見えなくなるまで、手を振つてゐた。

寢臺が屈いた。おばあさんは夜ぎほしやすやすよく眠れるやうになつた。この分では病氣もいまにすっかりよくなることだらう。クララのおばあさまは、まだその上に、山の冬の寒さを忘れずに、いろんな温い著物をいっぱい送つて下さつたので、おばあさんは丸々著ぶくれて、今年の冬はもう、あの隅つこで震へてゐなくてもよいだらう。

デルフリ村では、今大仕掛けの普請がはじまつてゐる。お医者様がいよいよ引き揚げて來たのである。今のところは、家の建つまで、去年泊つた宿屋に泊つてゐる。みんながおぢいさんミハイディが冬の間だけ住んでゐたあの古い家を買へミ勧めるし、天井の高さや、立派なストゥヴから見ても、昔はたしかに相當の人の住ひだつたらしいので、お医者様は買ひ取つて、手入れをさせてゐるのである。おぢいさんの獨立心の強い氣象をよく知つてゐるので、家を半分に仕切り、一軒には

お医者様が自分で住み、お隣りにおぢいさんミハイディが暮らせるやうに、修繕させてゐるのである。裏庭には、二匹の山羊の氣持のよい冬の宿にミ、温い丈夫な壁の山羊小舎まで、用意されてゐる。

お医者様とおぢいさんは、日増しに仲よしになつて、毎日普請場を見てあるきながら、話は又してもハイディのこゝに落ちて行くのだつた。二人にミつては、この家で、あの快活な子供ミ一緒に暮らせるさういふのが、なによりのたのしみだつたのである。

ある時も、かうして並んで普請場に立ちながら、お医者様はおぢいさんに云つた。

「多分御同感だと思ひますが、わたしはあの子は親身の娘のやうに思つて、たのしみもあなたミ同じ様に分けていただいてゐますので、さうかその責任も分けていただいて、出来るだけのこゝをさせていただきたいのです。さうすれば、なんだかしぜん權利もあるやうに思へて、年をミつてからも、安心して世話をしてもらへるやうな氣がするのです。あの子に最後の世話をしてもらふのが、わたしのたつた一つののぞみで、今からたのしみ

にしてゐるのですが。あの子には、あなたやわたしがあるなくなつたあさまでも、安心して行けるやうに、わたしの娘として、將來の備へをしてやりたいのです」

おちいさんは、何も云はずにお醫者様の手を握りしめた。お醫者様には、おちいさんがどんなに感激し、感謝し、喜んでゐるかが、その眼の色でわかつた。

ハイディミペーテルは、この時おばあさんと一緒にゐた。ハイディには、お話しすることが山ほどあつたし、聴き手は一生懸命なので、三人とも息もつけないくらゐ夢中になつて、だんだんそばに寄つて來た。夏からこちら、逢つてしみじみお話しするひまなご殆んどなかつたので、お話しはいつまで経つても盡きるころを知らなかつた。この三人のうち、誰が一等うれしさうにしてゐるかさいふことは、きめるのがむづかしさうである。さうやら、お母さんのブリギッタかも知れない。ハイディの説明で、ペーテルが一生毎日曜に三錢づつもらふことになつたわけが、はじめてわかつたのであるから。

おばあさんが一等おしまひに云つた。

「ハイディちゃん、讀歌美を讀んでおくれ。わたしにはもう、勿體ないことに、これから先きは、生きてゐる間ちう、神様に今までいただいた数々のありがたい御恵みの、お禮さへ申しあげてゐれば、なんにもほかにすることがないやうな氣がするのだから」

(終り)

